

宇都宮冬綱が豊前国守護であったことを示す唯一の史料は次の『川瀬文書』である。

(田原直貞)
 豊前藏人三郎入道正曇代重海申す豊前国苅田庄地頭職の訴状これを遺す、氏家九郎、同子息掃部助、荒宇津大和孫太郎以下の輩、所務を濫妨すと云々、事実ならば、はなはだ然るべからず、彼の輩を退け下地を正曇に沙汰し付け、請取をとり進ずべきの状、件の如し

文和二年十二月二十日
(一三五四)

宇津宮常陸前司殿
(守綱)

御判(足利義詮)

(原漢文)

南朝方に投降した直冬は山陰の山名時氏と共に京都に迫り、吉野の楠木正儀らと図って、文和二年・文和四年と、一時京都を占領した。

豊前守護代 少式頼尚は延文四年(一三五九)、幕府側へ寝返って

西郷 頭景 豊前・筑前等の守護職を維持したが、この間、豊前国の守護代を務めたのが、**西郷兵庫允頭景**である。頭景の前に康頭という守護代が見えるが、彼も西郷氏であろうという(山口集正『中世九州の政治社会構造』所収『南北朝期の豊前国守護』)。

西郷頭景は観応の擾乱以前は軍事指揮官として行動し、頼尚が直冬方・南朝方となつてからは、政治面にも参画するようになった。



豊前守護代西郷兵庫允頭景の花押

頼尚が南朝方として行動していた正平十一年(一三五六)ごろから、西郷頭景は宇佐勒寺領大野井庄等を違乱し、頭景の従人らが神官・社僧を殺害したため、神輿を動坐して愁訴する事件があり、頼尚の守護職を改替して、国司五条左馬権頭良遠が派遣されて押領

された寺社領を宮寺に返還させたという(『八幡書法』『寺文書』)。

第8表 観応擾乱関係図

南朝方	北朝方		年号	將軍	鎮西管領	豊前守護	宇都宮氏
	貞和	観応					
正平	貞和	観応	正平	足利尊氏	一色範氏	少式資経	城井冬綱・佐田公景
北畠親房	足利直義	足利直冬	北畠親房	足利直義	足利直冬	少式頼尚	西郷頭景
懐良親王	懐良親王	少式頼澄	懐良親王	懐良親王	少式頼澄	如法寺門康	宇都宮隆房

三 征西將軍懐良親王

征西大將軍懐良親王は延元元年(一三三六)九月、八歳にして、五条頼元ら十二人を従え、九州に向かったが、瀬戸内海を航海忽那義範のもとで三年を過ごし、興国三年(一三四二)五月、薩摩津につき、谷山降信のもとで五年を送って、正平三年(一三四八)、宇土を経て菊池氏の本拠、隈府に入った。この時、二十一歳の若者に成長していた。

翌年には足利直冬が肥後に上陸して、鎮西管領一色道猷との対立が始まったから、九州の南朝方にとつても、勢力伸張の好機が到来した。

正平六年十月、足利尊氏が南朝方に降つて、弟直義を京都から追い出そうとすると、九州でも一色道猷が南朝方と合体して、太宰府の直冬・少式頼尚を攻め、直冬を中国地方へ奔らせ、頼尚は辛うじて一色勢を退けると南朝方に降り、菊池武光と共に、文和二年(一三五三)二月、筑前針摺原に一色直氏軍を破り、官方が優勢となつて、探題を肥前綾部城

に追い込んだ。

正平十年九月、肥前小城での合戦に勝利して、鎮西管領を九州から追出した懐良親王は筑後・豊後・豊前を遠征して、大友式部大輔氏泰・宇都宮常陸前司守綱・千葉二郎を降し、九州の北半分を制圧した。

宿敵ともいべき一色道猷・直氏父子を駆逐した少貳頼尚は、幕府からの工作もあって、正平十三年十一月、大友氏時の挙兵を菊池武光が豊後高崎山に包囲攻撃している隙をついて、幕府方に寝返り、筑後で挙兵した。前年、豊前守護職を改替され、五条頼遠を国司としたことが不満の一つとなっていたのであろう。

筑後川の大戦

正平十四年八月、菊池武光率いる南朝方は、少貳頼尚討伐のため、筑後川畔の大保原に戦い、これを破って、太宰府を包囲した。

この筑後川の戦いに、頼尚方として西郷兵庫允頼景（『太平記』には西郷兵庫助頼影とある）や城井守綱が参加した。守綱は懐良親王に接近し、守綱の家来、芳賀房則の放った矢が馬上の懐良親王の左脇腹に命中し、馬も射られて宮は落馬した。この時、肥後に住み、南朝方として活動していた宇都宮隆房（冬綱の弟）が駆けつけ、宮を助けようと戦ったが力尽き戦死したという。懐良親王は彼の忠死を賞して、肥後玉名郡木葉村に宇都宮大明神として祠ったという。西郷頼景も戦死したらしい（『太平記』、『西郷文書』に次の史料がある）。

鎮西において度々合戦の時、忠節を致し候由、大宰筑後守頼尚注申する所なり、もつとも以て神妙、いよいよ戦功を拙すべきの状、件の如し

(一三六〇)
延文五年三月十日
(有政)
宇都宮西郷出羽守殿

西郷出羽守は頼景戦死の後、家督を嗣いだ人物であろうか。

正平十六年八月、太宰府の背後宝満山の有智山城に籠城して菊池武光に攻撃された少貳頼尚は宝満山頂へ逃れ、さらに豊後の大友氏時を頼って没落していった。これより、応安五年（一三七二）、九州探題今川了俊が太宰府を攻略するまでの一二年間、懐良親王が九州の主人であった。なお、頼尚が有智山籠城中、宇都宮守綱が支援に赴き、公綱も同陣中にいたという（天本孝志『九州』、南北朝戦乱）。

豊前国司 懐良親王支配下の豊前国守護は頼尚の子息頼澄で、守五条 良遠 護代は菊池武光の弟武尚であった。頼尚の長子頼澄は以前から南朝方として行動し、伯父資経が頼尚の豊前守護代を西郷頼景と務めてきたが、頼尚が直冬に接近したとき、資経のみ尊氏方として行動しつづけた。

少貳頼尚と守護代西郷頼景が弥勒寺領大野井庄を違乱して、豊前守護を改替されたことは先述したが、宮方守護少貳頼澄と守護代菊池武尚も弥勒寺より押妨人と訴えられながら、京都郡近辺で勢力を扶植していた。次の史料はそれを示している（『八幡筆法』、寺文書）。

宇佐宮弥勒寺領豊前国庄保事

一 御所御手知行分

- (宇佐郡) 弘山庄 平周防守并菊池武光従人荒瀬幸明
 - 大野井庄 熊皮跡 久木原忠光 (国司五条良遠)
 - 典厩御手
 - 島原下崎庄 新田々中藏人 (五条良遠)
 - 屋山保 典厩御手 (勢カ)
 - 野庄 大藏一家并林原出定 自余略之 (二二八五) (マ)
- 正平廿閏九月 日



国司五条良遠の花押

すなわち、国司五条左馬権頭良遠が大野井庄・屋山保を知行し、新田氏が畠原下崎庄を、草野庄を大蔵一族が知行しており、「近年、御所の御手に属す人々、少分の土貢を出して、莫太の神事仏会料足を抑留せしむ」と訴えられた（『八幡善法』寺文書）。

九州探題

斯波氏経

正平十六年十月、新探題斯波氏経が豊後府中に着船し、大友氏時の楯籠る高崎城に入り、豊前進出を狙った。翌年八月、氏経・氏時軍は筑前の麻生氏、松浦党とも示し合わせて、豊前に侵入して、守護代武尚らと中豊前で戦い、守護又代官以下の部将三〇余人、計七〇余人を討ち取って、豊前一国大略降参して味方になったと阿蘇大宮司惟時へ報じた。氏経は貞治二年（一三三三）、周防の大内弘世を幕府方へ招き、筑前に侵入し、弘世の在国中は形勢がよかったが、帰国すると元に戻ってしまい、氏経の九州経略は失敗して京都へ帰ってしまった。

このころ、京都郡津隈弁分では、赤孫四郎・柳田頼範が薬丸・三郎丸・小屋敷名を押し妨している。宇佐宮惣検校益永内輔に訴えられ、国司五条良遠が久下七郎入道に命じて益永方へ打ち渡させた。四年後には宇都宮守綱の家来薬丸三郎左衛門尉が弁分内丸名を違乱していると訴えられ、守綱の返答を求めたが音沙汰がないので久下七郎入道へ催促を命じている（宇佐『益永』）。武士による荘園侵略が活発で、庄園領主側に立つ南北朝方の国司や守護は、自身も任国内に経済拠点を確立する必要もあって旧勢力と対立するという矛盾に苦悩を深めていた。

四 九州探題今川了俊

豊前守護

今川氏兼

応安三年（一三七〇）、九州探題に任命された今川了俊は、豊前・肥前・筑後・肥後・日向・大隅の守護職と備後、安芸両国守護職をも与えられ、翌四年、京都を出発し、備後尾道において、中国・九州の御家人に協力を依頼し、子息治部少輔義範を豊後の大友親世の拠る高崎城へ送り、豊前宇都宮一族野仲郷司（政道カ）の居城（長岩城カ）へ弟の弾正少弼（霜台）氏兼を、肥前松浦に弟頼泰を先発させて松浦党一揆を組織して、豊後と肥前方面より太宰府に迫る作戦をとった。自身は安芸・備後の武士を率いて、正面より豊前門司に渡り、博多から太宰府を攻略することにした。了俊が、この年十二月、門司に渡り、赤坂（小倉北区）に陣をとると、宇都宮経景らに加わり、翌応安五年二月、大内弘世・少弐冬資等をもって麻生山（八幡西区）・多良倉・鷹見岳を攻め落とさせた。

今川了俊関係系図



高崎山の合戦

肥前の頼泰は、長島庄（武雄市）から蟻打を経て、高宮（福岡市）の了俊の軍に合流したが、豊後の義範は、菊池武光軍に包囲されて、百余度の合戦を繰り返すほどの苦戦で動きがとれなかった。了俊の渡海を知った武光が太宰府へ帰還した後、大友前惣領氏継が南朝方に転じて、豊後南部で対立したため、義範の博